

第3節 アメリカのカジノの現況

アメリカのカジノというと、ラスベガスのような大規模総合型カジノを想像しがちであるが、その内容はテーマパークの如き大型カジノホテルから、日本の小さなパチンコ店同様のスロットマシンを数台置いただけの小規模カジノに至るまで、さまざまな規模、種類のカジノが存在する。ここでは、その中から大規模カジノを例にとって分類してみよう。

アメリカのカジノはまず、その立地によって大きく分けて2種類に区分され、それはさらに細分化することができる。谷岡一郎氏によれば、それは（図表2-7）のように整理される（以下、写真も同氏提供）。

図表2-7 アメリカにおけるカジノのタイプ（分類）

分類		代表的な街（州）
地上カジノ	観光地型	アトランティックシティ（ニュージャージー州） ラスベガス（ネバダ州）、 ニューオーリンズ（ルイジアナ州）
	都市・郊外型	ブラックホーク（コロラド州）、 デトロイト（ミシガン州）（国境型の性格も強い）
	州（国）境型	チュニカ（ミシシッピ州）、 レイクチャーチル（ミシシッピ州）
船上カジノ （リバーポート）	遊覧(クルーズ)型	ゲイリー（インディアナ州）、 ダベンポート（アイオワ州）
	ドッグサイド型	シカゴ（イリノイ州）、 シュラベポート（ルイジアナ州）

（出典、谷岡：2002）

図表 2-7 ではまず、施設の存在するのが地上か否かで区別している。地上に立地するカジノの中もさらに、その地勢的な分類に応じて(1)観光地型、(2)都市・郊外型、(3)州(国)境型に分けることができる。

(1)の観光地型は、ラスベガスに代表されるような形態である。そこでは、カジノやホテルを中心にアミューズメントの大規模な「コンプレックス(Complex)(複合体)」が形成され、顧客はそこに滞在して長時間を費やす。対象となる顧客は地元住民ではなく、国内外から訪れる観光客である。カジノは観光ホテルの内部や併設された付属施設として存在し、周辺にはビーチやゴルフ場、名所旧跡、国立公園等の名勝、博物館、遊園地、レストラン、テーマパークといった観光資源が豊富である。顧客はそこで一角千金を狙うというよりも、濃密な時間を消費することに対する対価として貨幣を支払い、カジノもその中の一つとして存在する。

写真 1 エジプトをテーマとした「ルクソール(Luxor)ホテル」



写真2 イタリアをテーマとしたラスベガスのホテル「ベネチアン(Venetian)」の内部



写真3 カジノ内部のクラップス・テーブル (Craps table)



次に(2)の都市・郊外型とは、大都市の内部や近郊に位置し、観光客ではなく日帰りで訪れる近隣の地元住民を顧客対象とする。この形態では(1)のような大規模な観光施設のコンプレックスは必要ではなく、比較的中小規模のギャンブルを主目的とする施設が多い。その場合は、都市からの交通アクセスの利便さが重要となる。

ニューヨークから車で2, 3時間の所に立地するアトランティックシティーはこれと(1)の中間形態であり、ブラックホークなどがこの形態の典型となる。デトロイトの場合は(2)と、後に触れる国(州)境型との中間に位置する。

しかし、顧客として地元住民のみを対象としたのでは資金のフローがゼロ・サムゲーム(Zero-Sum Game.)となり、地域内のみで資金を回転させているだけになってしまう(例えそれだけでもその効果は大きい)。

これに対し、(3)の州(国)境型は、自州や自国の中心地からは離れた他州、他国との境にカジノを建設する。このパターンは、他州(国)の貨幣を吸収することを目的として建設される。この形態は外部から資金を集めるという意味で(1)と同様、最も効果的に地域経済に寄与し、しかも(1)程には大規模の設備投資を必要としない。カナダのウインザーとアメリカのデトロイトに建設されているカジノは、この典型であろう。

またミシシッピ州チュニカに代表されるように、カジノは「地域興し」手段としても極めて有効である。確たる観光資源も無かったチュニカは、カジノの導入によって全米最貧地域から一躍大躍進を遂げた。1992年から2001年の10年間で、失業率は26.2%から4.7%へと減少、1人当たりの平均年収も11,975\$から20,203\$とほぼ倍増したのである。

チュニカ成功の大きな要因の一つは、チュニカが立地的にテネシー、アーカンソー両州というギャンブルには厳しい州の大都市に近接していたため、両州の顧客を吸収できたことにあるのである(谷岡2002)。

カジノの形態として地上立地型の他のもう一つのパターンが、かつて19世紀に盛んであったリバーボート型カジノ(船上型カジノ)である。船上型カジノは、地上型と比して出入り客の把握が容易であるために、犯罪のコントロールが行い易いという利点がある。また土地を収得する必要がなく、また明確な「地元住民」が存在しないために反対運動が発生しにくく、地元対策費もそれ程必要としない。

その結果、住民の理解が容易且つ収益率の高いカジノの建設が可能となり、これが1980年代にカジノが多く州へと波及する(第四の波)に大きな役割を果たしたのであった。1991年にアイオワ州でリバーボートがスタートした際は、カジノの抱える負の要素への警戒も見受けられたため、掛け金の上限も

5\$と定められ、一人当たりが使える予算も 200\$と制限されていた。だがその規制も現在はほとんど撤廃されている。

写真4 リバーポート・カジノ（イリノイ州：ハラーズ（Harrah's））



従来、このリバーポート・カジノの欠点としては、①出港時間に間に合わなかった顧客を搭乗させられないこと、②船であるために船酔い等の恐れがあり、気象条件に影響を受けること、③船の機動部のコストが嵩むこと、などがあった。

その結果、1992年のミシシッピ州の合法化ではこれを解消すべく、船は航行することを義務づけられなくなり、棧橋に繋留したままの状態でもカジノを営業できることとなった。この方式は「ドッグサイド船（dock side）」、「クルーズ・トゥ・ノーウェア（cruise to nowhere）」と呼ばれ、機動部のスペースを有効に活用できるようになったこと、積載重量の制限が無くなり搭乗人数がほぼ無限になったこと、機動に要するコストが減されたこと等によって収益性をさらに高めることとなった。